

学会運営エンジン「touche」のおすすめ

Introduction of web-based meeting-organizing engine "touche"

北海道大学触媒科学研究所 大谷文章
Institute for Catalysis, Hokkaido University
Bunsho OHTANI

The web system "touche (TOtal User-Centered Html-generating Engine)", open for non-profitable meeting organizing committees free of charge, for organizing a meeting (hopefully) entirely on the Internet is introduced. Use of "touche" is highly recommended to save time for management of meetings and to re-think the meaning of meetings making the meeting high quality and to enjoy meetings as organizers as well as participants.

1. 「touche」とは

「touche (=TOtal User-Centered Html-generating Engine)」は、著者が開発して無償で公開している学会運営用スクリプト(ウェブ上のアプリケーション・現在北海道大学のサーバを利用)。そのコンセプトは2つだけ。ひとつは「学会運営を可能な限りウェブシステム上で完結させる」こと。プロトタイプができた2013年から昨年までは、会場関係の業務だけは例外だったが、リモート開催があたりまえになった現在では、100%達成可能である(というよりそうせざるをえない)。もうひとつは「運営スタッフの負担を可能な限り軽減させる」こと(じつは「参加者がつかいやすい」ことは明示的にはふくまれてない)。2020年8月現在、13の学会(討論会、セミナーあるいは研究発表会など)の利用実績がある(といっても2020年に(現地)開催されたのはひとつで、いくつかは延期、のこりはオンライン開催の方向で調整中)。スクリプトは1つだけ。それぞれの学会のウェブシステムでは、それぞれのデータ(群)を参照して表示される。

2. ウェブ上での学会運営とは

よくあるのは、「touche」が学会の「ホームページ」であるとの思いこみ。ウェブ上での学会運営というのは、「ウェブ上にしかない=ウェブシステムで完結させる」ということ(コンセプトI)。表示されるウェブページのHTMLドキュメントを「ダイナミック」に生成させるために、データを一元管理することである(おおいに反感を買うのを承知でいえば、スタティックなウェブページをつくった経験があるという程度の実行委員(あるいはその下請けの若手研究者や学生)がつくる学会のホームページとは次元が異なる)。それだけといえばそれだけだが、このコンセプトIが、担当者の負担を可能な限り低減すること(コンセプトII)を実現可能にし、さらに、その結果として、学会の公平性、透明性、保存性、利便性、そして、最終的には学会の質を向上させる(はずである)。

例をあげよう。(a) スケジュールはすべて秒単位で設定され、(ほかのデータもそうだが)ユニークである。こ

のため、おもとのデータを変更すると、すべての関連表示が変更され、時間の経過とともに表示が変化する(これが「ダイナミック」の意味)。(b) 発表の申込の期限を延長する場合、公平性という観点からいえば、延長されたのをしらずに断念するケースが発生することは避けたい(一種のコンプライアンス)。このため、期限がウェブシステム上だけにしめされるように、学会誌などの会告欄用に「会期と会場だけを掲載した」会告原稿が自動的出力される。なお、期限後の申込については、一般には公開されない期間限定の「バックドア」を使用させるので、負担は増加しない(バックドアの期限をきめるだけ)。(c) この学会でもそうだが、発表者(登壇者)は参加登録が必須である。「touche」では、(あたりまえだが)発表申込も参加もオンラインで登録されてデータが蓄積され(それらがプログラム表示やネームタグ印刷のファイルの自動出力に利用される。宿泊セミナーの部屋わり/バスわりも可能)、そのデータのなかで、共通のIDとして「ふりがな」がつかわれ、参加が未登録の発表者(+座長と審査員など)に自動的にメールを送信できる。もちろん、参加登録費の領収書は各自がダウンロードする設定(印影もデジタル)。(d) 要旨もそのPDFファイルがデータとして一元管理されている。発表(講演)番号や著作権表示は、表示(ダウンロード)時に自動的に挿入されるので、途中でプログラムが変更されても自動的に対応する(もちろんプログラム編成もオンラインでおこなう)。ちなみに、PDFファイル(およびすべてのデータ)はアクセスできない領域に保管されており、要旨を表示させる場合には、該当する要旨のPDFファイルを連結した仮ファイル(30分で消滅)として表示している。(e) 広告(協賛)依頼はあらかじめ電話やメールで内諾をとったのち、ウェブシステムメール送信する。といっても、依頼状そのものはメール添付ではなく(添付するとあとで修正できない)、依頼状を表示させるURLを連絡するだけである(座長や審査員への要旨の送付もおなじ)。訂正、修正があってもそのことを連絡するだけでよい。(f) 基本的に冊子体の要旨集を発行しないことをおすすめしている(ウェブシステム外だからであ

る。といっても原稿は自動的に出力できる)。発行しないと協賛広告をとれないとの心配はご無用。いまどき、そんな企業はない。ただ、会社のウェブサイトリンクをつけても、どれだけ閲覧されたかがわからないので、場合によっては閲覧回数を記録して報告することも可能(バナーの位置でクリックされやすさが異なるので、協賛金によって、バナーの出現位置が確率制御されている)。(g) もちろんアンケート調査もその集計も自動で可能。回答のアンケートのインセンティブとして次回の参加登録費の500円割引クーポンをつけたこともある。次回登録時にクーポンコードを入力してもらうだけ。(h) 参加登録費をクレジットカード決済にすれば、管理はもっと簡単になるのだが、手数料の発生をきらってか、これまで一度も実装の要望がない。要望があればよこんで実装する。

3. 運営担当者の「しごと」とは

前回「touche」で運営された学会をおなじ「フォーマット」でやるのであれば、スケジュールなどのデータを設定するだけ。とはいっても、実際にはいろいろと「修正/追加」したいことがでてくる。また、はじめて「touche」で運営する場合には、これまでの「フォーマット」をウェブシステム上で実現できるようにスクリプトを修正する(前述の2つのコンセプトに反することがない範囲内。そもそも運営をはじめするには、2つのコンセプトを理解し、遵守することに(もちろんオンラインで)同意いただいている)。ただし、実際に修正をこたわったことはない。なぜかといえば、ウェブシステムでできないことがないからである。「こんな処理を『クリック1回』でやりたい」とか「入力をまちがったら、こんなメッセージを表示させたい」とかの現場の要望を反映させた結果が現在のスクリプトである(ひとつのスクリプトなので、どこかの学会でとりいれたフォーマットはすぐにほかの学会でも利用可能)。オープンソースではないが、「touche」はつねに変化しつづけている。これは、商用の学会ウェブシステムでは(たぶん)実現できない。なお、データをつかってダイナミックに表示するから、シミュレーションも可能で、「管理者/実行委員モード」でログインすると、過去でも未来でも、過去の開催分であろうと表示でき、設定したデータがどのように反映していたか/するかを確認できる。また、「ダミーデータ」を設定すれば、現実システム稼働中でも、実際とおなじ処理をシミュレートできる。

4. 「touche」のおすすめ

もともとは、ある研究発表会の発表申込画面の作成を依頼されてスクリプトをつくりはじめたのが原型。研究室の助教が研究発表会の実行委員になり、オフラインで膨大な業務をおこなっているのを見て、その業務をすこしずつウェブシステムにとりいれていった。そのシステム(当時は

その研究発表会の専用)をみたべつの学会の主催者から、おなじように利用したいという問合せがあり、それを機会にスクリプトのユニバーサル化をはかったことが拡張のきっかけである。だいたいどんなことでも実装可能(協賛広告のバナーを10回クリックするとお菓子のクーポンQRコード発行とかも)だが、コロナ禍でオンライン開催になって気づいたら、基本的に「もうほとんどできちゃっていた」のであった。講演・口頭発表をZoomなどのアプリケーションで組みこみ、プログラムからリンクすることは簡単。ポスター発表は基本的なフォーマットそのものをかえて、ディスカッションをテキストベースでおこなう方向で調整中である。この記事が出版されるころには、完全オンラインでの学会が進行中であろう。

で、なぜ「touche」がおすすめなのか。それは、その学会そのものについてかんがえる(かんがえなおす)機会となるからである。ほとんどの学会は一回ごとに実行委員がかわっていくため、ともすれば「順番がまわってきたからしかたなく、前回とおなじようにやる」ことになる。日程をふくめたいろいろな設定をみなおしていくプロセスは、その学会がなにを目的として、どのような特徴をもって開催されるのか(されるのがいいのか)ということ「あたりだして」くれる。オンライン開催にすると、ほかの学会とおなじになってしまうのであれば、なんらかの「ちがいを」うたがす必要がでてくるかもしれない。つまり、担当者の負担を軽減することによって、「なにをめざしてその学会を開催するのか」を問いなおし、それを考えることによって学会運営をたのしむことが可能となる。そして、結果として学会の質が向上することが、開発者の野望である。

URLは「<https://touche-np.org/meeting>」。「仮想学会(VIRTUAL2020)」でウェブ上での管理・運営の体験も可能。ご連絡は「bunshohtani@gmail.com」までお気軽に。

おたにぶんしょう



北海道大学触媒科学研究所・教授

略歴： 1979年京都大学工学部石油化学科卒業、1984年京都大学大学院工学研究科博士課程石油化学専攻研究指導認定退学、1985年京都大学工学博士の学位取得、1985年京都大学工学部助手、1996年北海道大学大学院理学研究科

化学専攻助教授、1998年北海道大学触媒化学研究センター(現触媒科学研究所)教授、2022年3月定年退職。1999年北海道大学大学院地球環境科学研究科物質環境科学専攻(現環境科学院環境物質科学専攻)に参画。現在の研究分野/テーマ： 光触媒反応と材料科学の基盤研究